

雲天通信

発行=雲天友の会 949-6553 新潟県南魚沼市清水 小野塚忠男方 tel:0257-82-3473 fax:0257-82-4581

雲天の現状と今後

小野塚 和彦

会員の皆さん、これまで本当にお世話になりました。「雲天」一家は、平成元年ころから二十五年という長きにわたり、皆さんから力強い応援をいただき、「山の宿 雲天」の建設、さらには営業においても誘客や宣伝などのご支援をいただきました。大変ありがとうございます。父忠男ともども厚くお礼申し上げます。

雲天の建設時は、我々若手は、上越方面で子育ての真っ最中でした。じいちゃん、ばあちゃん、丁度今の私たちの年頃でした。退職金をもとに皆さんからの応援を得て、後先考えずに雲天新宅の建設に挑みました。

完成後は、にぎやかに皆さんを巻き込んで盛大にお客さんを誘致して営業してました。じいちゃん婆ちゃんにとって最高潮の時期だったと思います。

雲天の設備も二十五年を超え、補修や修繕が必要などが増えています。今年の修繕は、屋根のトタンのペンキ塗り(九月)、入口の上のアクリル板の一部取り替えでした。湿気の溜まった一階の床板の張り替えは自分でやってみています。

囲炉裏部屋の隣り部屋は、畳替えをしたことで家全体が栄えているようです。障子の張り替えや剥がれたクロスなどの修繕など自分でできそうなことをコツコツとやっています。

風呂のタイルに挑戦しましたが、タイルの扱いや接着など知識のない素人にはなかなか難しいです。じいちゃんは、耳が遠くなり、会話が大変になっています。週に何日かデイサービスに通い、糖尿病や足のリハビリに月に一、二週間ほど入院して調整しています。寒くなるにつれ、調子の悪い日ができて、入院になることが増えています。

【新しい試みについて】
秋のお客さんに「暮れのころ、餅つきをさせてもらえないか」という申し出があり、以前あった臼はなくなくなっていたので方々探し、秋山郷で七十年ものという中古の臼を見つけ、何とか私一人でも持ち上げられる重さと、赤樫という材質が気に入って、購入しました。一抱えもある大きさで、内側が広く縁が薄い臼です。

手伝いができる若手がいなくて餅つきができないので、T.W.Vの山小屋ワークで冬囲いの準備にきた学生たちに協力を頼み、早速この臼で餅つきをやってみました。

真ん中の座敷に八畳のシートを敷き、ゴザに臼を置き、婆ちゃんが使っていた漬物桶に杵を浸して準備しました。

最初は、蒸米のふかし具合も硬めで、お客さんがどのくらい食べるのかわからず、母ちゃんが二升のもち米を二回用意しました。

夕食を始めてから一時間程したころに餅つきを初めました。お座敷で大丈夫かと不安な気持ちもありましたが、始めてみるとお客さんのノリ

の良さにたまげるほどでした。最初は私が捏ねてつき始めましたが、久々の餅つきで思わず臼の縁を叩いてしまいヒヤットしましたが、樫の臼はビクともせず、杵の方が若干傷ついてしまいました。初回の二升の餅は、おろし大根とアズキで食べてもらいました。二十四名ほどのお客さんで二升の餅をペロリと食べましたが、後の二升の餅は、さすがに食べきれず、のし切り餅にしました。



新しい臼と杵での餅つき

二回目は、十月二十九日の「八海山を楽しむ会」で、八海山の会社も「面白そうなので、ぜひやりましょう」と賛成してくださいました。

新宅の普請にあたった高橋建設の社長さんも参加されて、先頭に立ちもち米を捏ねてくださいました。

地元の若いグループも初めて杵を持つ人たちが、徐々に慣れてきて、粘りのあるうまい餅が出来上がりました。二升の餅は、ひねって

そのまま餡子と大根おろしで食べてもらったところ宴会の終了までには売り切れしました。

三回目は、古い雲天の時から毎年来てくださる茨城県と栃木県の山の会の餅つき会でした。この会の年配の方々は慣れていて、返し役まで引き受けてくださいました。宴会の最中に餅つきを始める時水をささないかと心配していましたが、みなさん交代しながら楽しんでくださいました。

更に、希望で忘年会でも餅つきをしました。母ちゃんの料理は、意外に餅とあうこともわかりました。中でもけんちゃん汁を温め、餅を入れて食べる鍋物は人気がありました。今後も希望があれば、相談しながら続けようと思っています。

【雲天の今後について】
巻機山の人気は今も高く、登山者の数は横ばいですが、百名山の人気分だけ増加傾向とっています。

ところが清水に宿泊するお客さんは減少傾向です。この傾向は、清水のどの宿も同じようです。

交通の便が良くなって日帰り登山が増えていくこと、営主の高齢化が進み、設備の維持などに対応できなくなっていることが原因だと思っています。百名山めぐりの方々の宿泊もあります。小グループ化して、宿泊日も分散するなど、営業面では難しい面もあり、リピーターにはなりにくいことも問題です。

こうした中、ばあちゃんの時代のな
じみの山岳会の方々が久しぶりに来て
くださいました。皆さん、巻機山とと
もに雲天を懐かしみながら、山菜やキ
ノコ料理を楽しんでくださいます。
かつて雲天の建設着手時の平成元年
にテレビの取材があり、

「山のお客さんが減ってゆく中でど
うして借金までして、山宿を作っ
ているのでしょうか」

と、レポーターがいぶかるような番組
が流されたことを覚えています。

現状は更に深刻で、山のお客さんの
減少や高齢化が進みつつあります。

雲天は、友の会の皆さんの力で支え
られてきました。雲天新宅建設という
目的のために発足したこの会も、一旦
解散となります。

今後は、雲天側で「友の会」を引き
継ぐかたちで新たな会を立ち上げた
いと考えています。これまでの会員の
皆さんも是非参加してください。メー
ルやネットなどで情報を送りますので
よろしく願います。

雲天通信も今回が最後になりました。
二十五年間も、編集や発行、発送など
「雲天通信」を支えて下さった多くの
方々に心から感謝申し上げます。本当
にありがとうございました。

おもてなし

小野塚 奈穂子

会員の皆さん、いつもありがとうございます。
ございます。

今年は、昨年より暖かい日がおおく、
巻機山に何回か雪がふりましたが、ま
だ里まで下りてきません。晴れ間に、

春に咲くオレンジ色のチューリップの
球根や山アジサイの木を植えました。

秋は、いそがしかったです。春の山
菜の良い時季にはそれほど忙しくはあ
りませんでした。七月に登山のお客
さんが来て下さるようになってから、

急に活気づきました。ばあちゃんのこ
ろからの雲天の伝統で「下山されて無
事を確認してから宿代をいただく」と
いうことをしています。そのとき、

春はちまき、夏はスイカ、秋はキノコ
汁などを食べていただいています。ま
たお茶を飲んでいただきながら山の様
子を聞かせてもらっています。ほかの
お客さんの予約の時に山の様子を聞か
れることから、登った人から情報を少
しでも聞いておかなければならないの
です。

チマキは初めてというお客さんもい
て、新潟の名物だからと食べていただ
いています。来てくださったお客さん
に気持ちよく帰っていただきたと思
いますし、お客さんに対する感謝の気
持ちはです。

夏は、お一人のお客さんも多く、六
人で満室という日もありました。全国
各地からいらしたお客さんがみなさん
一緒に食事され、会話が弾み楽しそう
でした。お客さんが「こんなに手をか
けて、食事を出してもらって嬉しかっ
た。一生懸命やって行けば口コミでお
客さんが増えますから、頑張ってください
と

また今年、「巻機には何回かきて、ほ
かの宿に泊まっていた」というお客さ
んが何組かいらして、「この宿は初めて
泊めてもらった」と言いながら、建物

を見たり、料理を食べたり、囲炉裏で
お父さんと話したりして喜んでいただ
いたようです。

暑い夏のおかげで秋のキノコの出は
良かったです。しかし、じいちゃん
の舞茸は、新しい菌床を入れてないこ
とから昨年よりも量が減って、あつとい
う間に良い時季が終わりました。

ナメコは、家で採れた分では間に合
わず、キノコ生産組合から何回も買っ
てたつぷりと食べてもらいました。

今までは、けんちん汁をお椀に盛っ
て食べていただいていた。この秋
は、田舎風の弦のついた鉄鍋にけんち
ん汁を入れ、上にキノコをたつぷりと
載せ、熱々のまま出して、木のしゃっ
つこで自分で盛っていたことにしま
した。これは好評でつる鍋と木のしゃ
つこを買いました。昔懐かしい鉄
のつる鍋も良かったものと思います。



キノコ具だくさんのけんちん汁

また、餅つきは私たちが想像してい
たよりもずっとお客さんに喜ばれ、盛
り上がりしました。つき立ての餅をアズ

キとおろし大根で食べていただきまし
た。小豆は甘さ控えめに、大根おろし
はさっぱりとしていて、好評でした。
つき立ての餅はキメも細かく、こしが
あり、本当に美味しいと知りました。

昨年まで十月末の紅葉シーズンを終
えるとほとんど予約のない状態になり
ましたが、今年は土曜日ごとに十四人、
二十四人、十六人と各予約が入りまし
た。二グループ十四人の山の会のお客
さんは昔からの常連さんでした。帰り
際に話してくださいましたので、ばあ
ちゃん調子がおかしくなり始めたこ
ろからしばらく来ていなかったそうで
す。今回来てみて、本当に楽しかった
からまた来るからと喜んで帰られまし
た。地元山の会の忘年会を二つもい
ただき、本当にありがたいです。

会員の皆さんには、長く雲天を支え
て頂き、本当にありがとうございます。
ご迷惑のわからない範囲でこのご
縁を大切にさせていただきますと思
います。

玉木会長急逝

二代目会長、玉木強さんは十一月十
四日に急逝されました。

玉木さんは、昭和六年に北海道北見
市で誕生、大学で企業会計を学んだ後、
奥さまの郷里の新潟市で税理士事務所
を主宰されて以来、県の税理業務の発
展に尽くされてきました。

また、仕事以外にも、ライオンズク
ラブや寺院の役員など地域社会活動に
も広く活躍されてきました。

この六月、友の会の総会直前に膀胱
ガンで入院され、治療後、八月に退院

されましたが、その後体調を崩されて再入院され、以降、治療の甲斐なく、今日に至りました。

雲天を昭和三十年代からひいきにしてこれ、友の会では、平成十八年から故望月力さんの後任の二代目会長として、また会の会計のお目付役として多大な貢献をなさいましたが、奇しくも、友の会の閉会と期を同じくして生涯を閉じられたことになりました。

会員の皆さんともども、ご冥福をお祈りしたいと思います。

【弔辞】

雲天

玉木会長さんが体調を崩されたという話を聞き、八月中旬に夫婦でご自宅へお見舞いに伺いました。お元気な様子で出てきてくださり、病気の話しをしてくださいました。このとき「定期的に痛み止めを入れている」と話されましたが、お元気そうな様子でした。

こんなに早くお別れが来るとは想像もしていませんでした。

お通夜に夫婦で伺い、会場のご遺影が雲天でお会いする玉木さんの笑顔そのままで声が聞こえそうでした。いつもクーちゃんを散歩に連れて行ったださったお姿を思い出します。お通夜でうちのじいちゃんと幾つも変わらぬ年齢と知り、驚きました。ご冥福をお祈りいたします。玉木先生本当にありがとうございます。

ポスト友の会時代へ向けて

友の会理事長 三田 育雄

去る七月五日の総会をもって、雲天友の会は解散の運びとなりました。会

員を募った年(平成二年)の春から実に四半世紀の歳月が経過し、この間、雲天を取り巻く環境、そして雲天自体も大きく変化しました。

翻ると、不安の下で走り出し、時代の重みを感じさせる建築とへんびな環境の中で「ひとりぼっちの叛乱をする」主に惹かれた客で賑わった初期十年、主の加齢が進んで生業の営みが後退した中期十年、立て直しへ模索し始めた五年だったと思います。

そして今、雲天は、大きな転換期を迎えていると思います。

雲天の顧客層は、いうまでもなく、登山客と山菜愛好客で、中でも、囲炉裏の周りに座して気炎を上げる登山客は、とうちゃん、かあちゃん、そして、てんこ盛りの山菜田舎料理と八海山にひかれて足繁く通うリピーターでしたが、昨今は、加齢、疾病、物故などどかく足が遠のきつつあります。

そして、それに代わる顧客層が見えない状況が長く続いています。いよいよ雲天の新しい色合いを鮮明に出して行く必要があると思います。

新かあちゃん、装備・機器・調度品の手入れ・更新など、多くの負荷にもめげない前向きな取り組みと優しい心遣いが感じられるもてなしで着実に存在感を増しています。これだけ奥まった場所だけに、雲天にはさらに強く訴求するものがほしいところです。

それは、「食」ではないかと思いが、素朴さをこえた魅力を出すのが課題と思います。

雲天では、友の会の解散にあたって、宿の運営の助言者を求めているところ

ですが、感性豊かな旅の達人を見つけ、確かなアドバイザーやサポーターになつてもらう必要があると思います。

そういう意味では、雲天が時折、実施している「八海山を楽しむ会」などは、いわばアンテナショップのような機能を持つ有効な取り組みの一つだと思います。今後を期待します。

巻機山の家と雲天

友の会副理事長 吉田 光二

「巻機山の家」は一九八七年竣工です。今年で築後四十八年。個人会員制で雲天の父ちゃんも会員です。この間、一九八六年に会員の再登録と大規模な増改築を行い、中越地震後の補強工事を経て今日に至ります。

私は、一九八四年から二十五年間事務局を担当しましたが、この間、幾度もあった大雪、水害、大地震に耐え抜いてこられたのは、雲天あればこそで、雪堀り、草刈り、地元との調整、すべて雲天に頼りつきりで今日があります。

その最たるものが開発計画の反対でした。計画図では、山の家はグレンデのすぐ脇で上空をゴンドラが通るので営業小屋にして売店でもやるかと冗談で話していたのですが、開発計画があるうちは何回も水路を壊され、その都度復旧に苦労したことが思い出されます。結果、「父ちゃん巻機山を守る！」でした。歴史に残る偉業だと思えます。

その雲天が新築するので相談があるとのこと。T.W.Vの皆さん、早稲田H.Cの皆さんに交じって、当会も参加して後援会を設立することになりました。準備会では、当会の望月さんに後

援会長をお願いすること、建築資金を集めることの要請があり、望月さんに相談して、了解していただきました。

次の課題が資金集めでした。独自の趣意書を作って高体連や山岳協会に持ち込んでもらいましたが、いくらも協力できなかったのではないかと思います。

この資金集めから、資金管理、会の運営・二十五年に渡ってT.W.Vの皆さんが担ってください、果ては返済・清算の作業、会の発展的解消まで、まさに「おんぶに抱っこ」でした。

私は近年、健康を害して、十分お役に立てませんでした。この間に逝去された当会の望月力、高橋小一郎、安野正弘、佐藤荘市の故人共々、T.W.Vの皆さんに衷心から御礼申し上げます。最後に、雲天の益々の繁栄をお祈り申し上げます。

私の巻機山、そして清水

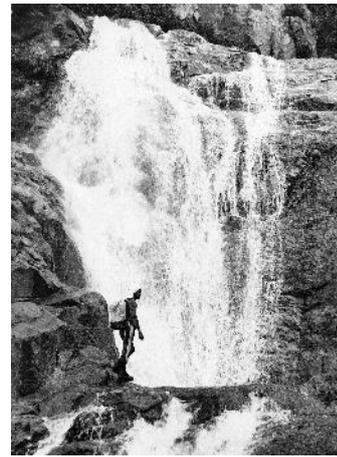
友の会監事 八木 守

昭和四十年八月 職場の先輩と巻機で沢登りをしようと、電車とバスを乗り継ぎ清水へ向かった。夕方予約無しで雲天に飛込むと、かあちゃんは何も言わずに「ヨシヨシ！泊まらっしゃい！」と温かく迎え入れてくれて非常にうれしかった。

その晩、囲炉裏に並んだ山菜料理が美味しかったこと・あれから半世紀、今でもその味を鮮明に覚えている。

翌日は七時半頃に出発、桜坂から米子沢に入った。しかし次第に雨足が強くなり下山することにした。昼前に雲天へ戻るとすぐ風呂に入れてくれ、ソ

バを食べさせてもらったのだが・・・それがまた旨かった。それからは、夏は沢登り、冬は春はスキーに清水へ通うようになった。



夏の楽しみは全身びしょ濡れになり水際を登るシャワークライミングで、特に米子沢の滝は気分爽快であった。

秋にはスクビ沢と割引沢の分岐を左へ、天狗岩の下を通りすぐ右側を直登、天狗岩上部の尾根に出て割引岳へと登った。巻機山頂へニセ巻機の池塘と黄金色の草紅葉がすばらしかった。

春スキーはアルペンスキーを背負って登り、山頂でスキーブーツに履き替



を登ることもできた。

えるスタイル。麓まで一気に滑り降りると爽快だった。主なルートは井戸尾根だが、条件が揃えば割引沢の雪渓

私の山仲間にはスキー好きが多く、アルペン競技(回転・大回転・滑降)もやっていた。小出、浦佐、舞子、石打、湯沢、岩原など強豪揃いの大会で入賞する者も。大会前日に雲天へ泊り、かあちゃんの料理と八海山で宴会をしたのが良い思い出である。

そのうちに家族サービスも必要となり、登川上流でのキャンプがお盆休みの恒例行事になった。多い時で三十人ほどが集まり、子供は陽が暮れるまで岩魚やカジカを追い、獲物は枝に通して持ち帰った。捌きかたを教えながら焚火で豪快に串焼きに、大人は炙ってカジカ酒にした。おおらかな時代であった。

そして、とうちゃんのこと・・・囲炉裏端でぼつりぼつりと子供、仕事、山の話をしてくれ、私の話もよく聞いてくれた。段々、民宿の親父ではなく自分の親父のように思えて本当に嬉しかった(私の父は幼い頃に病気で亡くなり、写真の顔しか知らない)。

その後、かあちゃん・とうちゃんに惹かれて雲天に通うようになり、現在に至る。感謝感謝であるが、かあちゃんに会えないのがさみしい限りである。

雲天さんでのゼミ合宿

TWVOB 松山 洋

二〇〇五年から、毎年九月末に雲天で研究室(首都大学東京 地理情報学研究室)のゼミ合宿をしています。本学科では毎年十月第一週の木曜日に「卒業論文中間発表会」がありますので、その完成度を高めるため、文字通りの勉強合宿です。九月末には紅葉が始ま

りつつあり、週末は雲天も混みますので、例年水曜日の十三時頃雲天着、その後夕食までずーっと「おおぐま」で発表練習と内容に関する議論、夕食後深夜まで卒論生は発表用のスライドの修正(準備が終わった学生さんから順に囲炉裏で宴会)、翌日の朝食後もう一度発表練習と議論、そして十二時頃雲天発、というのが標準的なスケジュールになっています。以前は帰路、六日町にある兼続庵で昼食を取っていた時代もありましたが(兼続庵は木曜が定休日なので、とおちゃんとかあちゃんから兼続庵に連絡していただいて、わざわざ開けていただきました)、最近はこの簡略化されつつあります。

初日の午後、「おおぐま」でゼミをしていると、たいてい雲天から差し入れがあります。コーヒーだったり、ふかしたさつまいもだったり、その時々によつて異なるのですが、大変ありがたく頂いています。午後の議論は白熱し、十八時の夕食に間に合いそうになくならないような電報(?)が差し入れられることもあります。絵心豊かなかあちゃんが描いたこれらの電報を「雲天友の会」の皆様にご覧いただきたいと思えます。

都立大のゼミ生

本日はあつかうさんご招待
又めいさんご招待
ご招待、ありがとうございます



松山先生

大喜びで朝めし(お餅)と
お水ぐらいはげれさす
あつぱいさんおせいのひょうくわ



「右図は、かあちゃんが「おおぐま」に届けてくれた電報。かあちゃん没後、雲天に返付」

事務局から

「友の会」解散に伴い、今回をもって「雲天通信」の発行を終了させていただきます。長い間のご支援、特に原稿をいただいた方々に感謝申し上げます。今後とも、雲天へのご支援をよろしくお願い申し上げます。

■雲天通信の一〜四十五号までの全号の電子化を進めています。近々、雲天のホームページにアップする予定です。

■友の会に関する今後の問合せは左記にお願いします。

問い合わせ先：井上 準二
方法：E-mail か ファックス

itfinouejunji@gmail.com
〇四七・三七二・一〇二〇四